

書 評

南開大学周恩来研究センター著
周恩来・鄧穎超研究会訳

『周恩来と池田大作』

(朝日ソノラマ、2002年)

小 出 稔

地球市民時代の歴史教科書

偉大な哲学を持った人間同士の国境を越えた出会いは、その精神の共鳴を通じて、国家の関係を動かし、両国民衆の間に永遠の友好と平和の礎すらもたらすことができる。中国・南開大学の周恩来研究センターが、十数年にわたる研究活動の一つの成果として刊行した『周恩来と池田大作』は、両氏の精神的交流と出会い、さらに池田氏による周総理の精神の継承が、民衆レベルの友好を基盤とする日中関係を築く原動力となってきたことを示している。

同著は、先に出版された中国語版¹が、中国の党史編纂に大きな権限を持つ中央文献出版社から刊行されていることに示されるとおり、周恩来総理と池田大作氏との出会いの意義を、客観的史料・史実に基づいて分析している。けれども同著は、公的歴史書にありがちな、表面的事実の時系列的な列挙に留まらず、両者の出会いの精神性と哲学的意義まで掘り下げた内容になっている。両者の出会いそのものが、「民衆のために働く」という両氏の精神的共鳴の結果であるため、その描写においても、哲学的次元まで論及する必要があったのだろう。客観的叙述とは価値中立的で無味乾燥な描写というアカデミズムの既成概念にとらわれていては、同著は完成しなかった。その意味で、同著の編者である周恩来研究センターの王永祥所長自身、人間の精神性が歴史に果たす役割について深く考察していたと思われる²。

同著は、1972年の日中国交正常化にまつわる秘話のひとつとして読むこともできる。むしろ、日中関係を学んできた人々の多くは、本書の大きな意義を、日中国交正常化にいたる交渉過程で、中国政府が公明党を日本の政界ルートとしてもっとも重視した理由を、中国側の資料を豊富に駆使して明らかにしている点に見出すであろう³。

従来の国際関係論や日中外交史の専門家による分析は、公明党ルートの説明として、民衆を基盤とする創価学会を支持母体とする公明党に周恩来総理が注目したという点と、周恩来総理が1971年6月に訪中した竹入義勝公明党委員長（当時）を個人的に信頼したという点に求めている⁴。しかし、これらの議論の多くは、その詳細において具体性に欠け、推測の域を出てこなかった。

『周恩来と池田大作』に収められた多くの中国側関係者の証言によれば、周恩来総理は遅くとも1963年時点で、既に創価学会に注目していた点が明らかになる。さらに、周恩来総理の公明党に対する信頼も、その支持母体である創価学会への信頼、なかんずく池田会長（当時）への期待と信頼に根ざしていたことがわかる。

特に、周恩来総理がなぜ池田大作氏を信頼するに至ったのか。その答えは、1968年9月8日の第11回創価学会学生部総会における池田大作氏の講演に求められる。同講演の中で池田氏は、日本のとるべき態度として、①北京政府の存在を承認すること、②国連における北京政府の正当な席を用意すること、③経済的・文化的な交流を推進すること、を提言した。当時の佐藤政権が対中国危険視・敵視政策を強める険しい政治的環境の中で、日中友好を訴えるのは、文字通り命懸けの戦いであった。事実、今日から見ると、きわめて当然の主張に思える池田氏の提言は、その発表直後から、日米の当局はもとより、多くの政治家やマスコミの厳しい批判の対象となったのである。

この提言は、「日本ではまったくといっていいほど報道されなかった」⁵だけでなく、その後の多くの戦後日中関係の研究においてもほとんど言及されてこなかった⁶。しかし、池田氏の提言は、その内容と精神性において、周恩来総理のかねてからの日中関係に対する考え方と符合し、やがて両国関係の大きな転換へとつながっていく。

国家の政治的代表に注目するアプローチは、特定の時点における国家間の政治的利害の調整プロセスを分析するには有効である。しかし、現実の国家間の関係は、日々移ろいゆく政治レベルの利害調整プロセスの単純な総和ではない。特に、国家間の関係を深い次元で規定しゆく市民・民衆の役割と精神性の力を無視すると、国際関係の長期的展開の方向性を見誤ることにもなる。1968年当時、池田氏の提言を批判した人々は、まさにこのような歴史的展望に欠けていたと言えよう。

周恩来総理と池田大作氏の精神次元における出会いとその哲学的共鳴は、30年前の日中国交回復への糸口となっただけでなく、その後四半世紀以上にわたる民衆レベルの日中友好拡大へとつながってきた。30年前の日中関係正常化の舞台で、華やかにその功績を称えられる政治家の多くは、その地位を去った後、その志と行動を継ぐ人もなく、日中関係への目立った貢献を残せていない。このことを考える時、周恩来総理が、なぜ日本の民衆に

基盤をおく創価学会の若き指導者である池田大作氏を重視したのかが理解できる。そして、その周恩来総理の精神を継承し、日中友好を推進してきた池田大作氏の哲学的生き方が明らかになるだろう。

周恩来総理と池田大作氏が、現実には相見えるのは、1974年12月5日の夜、僅かに30分ほどの会見かぎりであった。しかし、その一期一会の出会いの歴史的意義は、時を経るにしたがって大きく感ぜられる。その意義を世に知らしめる『周恩来と池田大作』は、民衆が主役たる世界を志向する人々にとって、貴重な歴史教科書と言えよう。

-
- 1 2001年3月に中国・中央文献出版社より出版。
 - 2 王永祥所長は、日本語版の最終整理段階にあった2001年11月23日に逝去。
 - 3 『周恩来と池田大作』日本語版の監修にあたった西園寺一晃氏も、本書に寄せた文で、この意義を強調している。同著P. 10。
 - 4 例えば、NHK取材班『周恩来の決断：日中国交回復はこうして実現した』（日本放送出版協会、1993年）pp. 101-102。緒方貞子著・添谷芳秀訳『戦後日中・米中関係』（東京大学出版会、1992年）pp. 84-85。古川万太郎『日中戦後関係史ノート』（三省堂、1983年）pp. 259-260。
 - 5 吉田実『日中報道回想の三十五年』（潮出版社、1998年）p. 155。なお、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞等の全国紙は、1968年9月9日の朝刊で、池田氏の提言のあらましについては伝えている。
 - 6 拙文を書くにあたり、偶々手元にあった日米の学者・研究者による戦後日中関係に関する書籍を十数冊チェックしてみたが、巻末の年表等の史料まで含めて、池田氏の提言に言及している研究は皆無であった。